

鹿教湯温泉と病院連携

—25年のあゆみ—

長野県厚生農業協同組合連合会リハビリテーションセンター鹿教湯病院

院長 藤田 勉

鹿教湯温泉の歴史は、古文書によればすでに元禄時代に文殊堂の建て替えが行われ、温浴客が来ていた記録があるが、昭和30年に現在の第3号井戸(56.5℃)のボーリングが行われるまで2ヵ所に自然湧出があり、温度も39.0℃と51℃であった。この井戸が1～2号井戸であるが、1号井戸は現在使用されていない。それまでは浴槽内温度は38℃前後の温泉泉の単純性石膏性苦味泉であったが、第3号井戸のボーリングが行われて以来高温性になり、浴槽内温度も40～43℃になっている。現在3～6号井戸が温泉開発会社として、丸子町が主体となって集中管理方式をとり、乱堀を規制している。

昭和31年、長野県厚生連が温泉療養所を開設した。当初は23ベッドで主に湯治客のための外来指導型の療養所であったが、ベッド増床とともに入院主体となり、昭和38年及び49年の施設近代化により現在466床(他に研究所病床99床)、名称もリハビリテーションセンター鹿教湯病院と改称されている(昭和49年)。

鹿教湯病院入院患者増化とともに、鹿教湯温泉の旅館及び商店数も増加の一途をたどっており、旅館数9→32、商店数8→46となっており、丸子町に登録される浴客数も年間7万5,000名から50万人を前後するまでになっている。

昭和30年、厚生省により国民保養温泉地に指定されるとともに、鹿教湯地区も文殊堂を中心に遊歩道、遊園地、駐車場等の環境整備がなされ、また厚生連との共同により地域暖房会社の設立、健康保養協会の設立などが行われ、昭和58年には近代的な温泉センタークアハウスの建設が予定されている。この中で鹿教湯保養協会は全国的にもユニークであり、鹿教湯病院側の指導のもとにトレーナーを置き、湯治客及び健康増進の団体客に健康ドック、体操、レクリエーションの指導及び健康講話などが実施されている。この保養協会は昭和52年に発足し、近年は年間1万数千名を対象に指導を行っている。クアハウス完成後にはクアハウスを中心にプログラムが組まれる予定である。

一方、昭和34年に長野県の単協が主体となって開始された集団保養事業が、昭和49年には参加者が9,000名を突破し、参加農協も全県の85%に達し、参加者は20～90歳代であり平均年齢は72歳であった。近年は長野県、愛知県、三重県の傷痍軍人が加わっている。参加者は一週間の間に毎日のプログラムが生まれ、トレーナーの指導のほかに医師や栄養士による健康大学が組まれている。

鹿教湯病院は脳卒中リハビリテーションの専門病院として、施設及び人員が充実しつつあり、併設のリハビリテーション総合研究所では各種団体からの寄付金を得て、内科及び整形外科的研究が進行している。

鹿教湯温泉の今後の課題として、現在進行中であるクアハウスを中心とした温泉地の整備と、総合的病院施設の充実により地域の諸組織と密接な連携による、近代的保養地としての位置づけの確立が挙げられている。

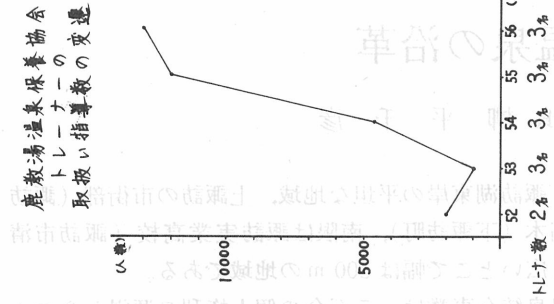


表 3

鹿教湯病院集团保養

56年度参加者の状況

総参加人員 9587人
参加者籍数 1/16 (県外85.3%)
平均年齢 71.8才

年代別利用人員	人数	割合
20代	1人	0.01%
30代	3	0.03
40代	13	0.13
50代	194	2.0
60代	2652	27.6
70代	4981	51.9
80代	960	10.0
90代	20	0.2

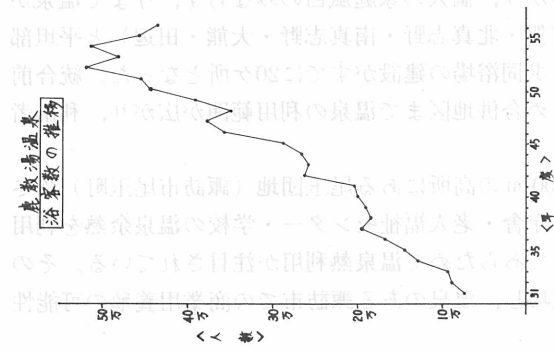


図 3

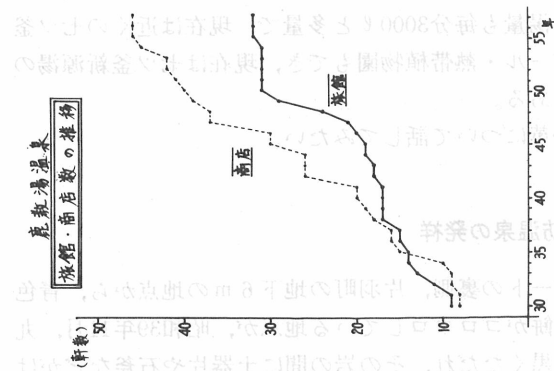


図 2

表 2

鹿教湯温泉施設環境整備25年の経過

- S. 34~35 遊歩道 300m
- 36 共同温泉館
- 37 共同駐車場
- 38~40 遊歩道 800m
- 48 アパロ
- 49 地域職
- 50 21番名
- 51 あり
- 52 トリ
- 56 温泉
- 58 温泉

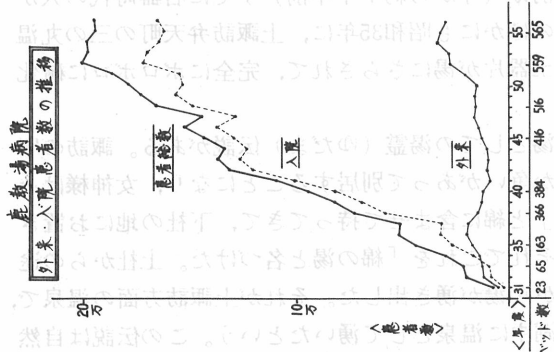


図 1

表 1

鹿教湯温泉

温泉の管理

温泉の管理	湯瑞旅館組合
共同浴場	
1号井戸 (S.29)	
内湯引湯 (S.31)	
2号井戸 (S.28)	文珠荘 (現・温泉ホテル)
3~6号井戸 (S.30-33)	丸子町温泉開閉 KK

昭和41年以降
三者統合による集中管理方式実施